
感想 共同研究に参加して

外園 豊基：早稲田大学教育学部

岩崎宏之先生の研究班のメンバーに加えて頂いたおかげで、「沖縄」が非常に身近なものとして感じられるようになった。

日本中世史、中・近世移行期を主たる研究対象とする私にとって、沖縄は遠い存在のものであった。この分野においては、いわゆる対外交渉史の研究を行っている方々を除いては、沖縄は直接には研究対象の素材とはなりにくいのであった。しかし、メンバーに加えて頂いたおかげで、沖縄への関心を持つようになり、関心の深まるにつれて琉球王朝などの歴史にも興味を有するようになった。

沖縄への関心が深まるにつれて、それに類する本・論文なども目につくようになった。なかでも「人類館事件」なるものを初めて知ったときは、大きな衝撃を受けた。1903(明治36)年、大阪で開かれた内国勸業博覧会で「民族展示」が行われ、会場内に「学術人類館」と称する見世物小屋があり、アジアの諸民族が生身のままで「展示」されていた。差別主義的な見世物であるが、なかでも「内地に近き異人種」として「琉球」の女性2名が見世物にされたという事実には驚いた。沖縄のジャーナリズムをはじめとする世論の抗議と非難の声が高まるにつれ、「人類館」の館主は、沖縄女性の「陳列」を撤去し、彼女たちは帰郷した。沖縄をいわば「内国植民地」として見る偏見と差別の視線が、そこに色濃くかげを落としていたことがわかる。

この「人類館事件」は、高校の教科書にも載っていないと思われるので、私は大学の、いわゆる一般教育科目の授業で毎年取り上げることになっている(詳細は、拙稿「前近代から現代を問いかける」《大学における歴史の授業》『歴史評論』557号参照)。

これは、ほんの一例であるが、現代沖縄の当面している多くの課題などについてはもちろんのこと、私は「沖縄」に多大なる関心を抱くようになった。その他、多くのことを学ばせていただいたが、沖縄が身近になっただけに、今後も「沖縄」にこだわり続けていきたい。

何はともあれ、このような多くの人々の集まりが円滑に運営されてきたのは、岩崎先生の学識・お人柄以外の何ものでもないことは衆目の一致するところである。